【郷土史への扉】

桜島大正大噴火の記録

鹿児島市から写したと思われる写真
（国分郷土館にて展示中）

昨年の三月十一日、東日本大震災が発生しました。多くの死者・行方不明者を出し、まだ苦しんでいる方もたくさんいらっしゃいます。自然の恵みに感謝しつつ、その力には敵わないことを実感しました。

霧島山も新燃岳の大きな噴火でいつ災害が起きるか分かりませんし、桜島の最近の噴火回数も気になるところです。錦江湾に浮かぶ桜島の姿は雄大で鹿児島県民の誇りですが、噴火や爆発による被害は計り知れません。

市街地や台地上で発掘調査をすると、深さ約三十センチあたりから比較的白色に近い灰色の火山灰が出てきます。層になっているところや、ブロック状になっている場合もあり、形状はまちまちです。これは大正三（一九一四）年に桜島が大噴火したときの灰です。この大噴火で死者・行方不明者は五十八人、全倒・全焼家屋は二千を超えます。大噴火の前年には霧島山麓の群発地震、伊集院付近の地震、霧島山噴火、鹿児島付近の地震、錦江湾の海水温上昇などが発生しており、数日前には井戸の水位変化、徐々に強まる有感地震などがあり、当日には白煙が立ち上り、大噴火が発生しました。

国分郷土誌の資料編には『桜島爆発日誌』が掲載されています。ここには一月十二日の午前十時ごろに大きく爆発して、人々がどのような対応をしたのか、三月四日までの国分の様子が克明に記録されています。

午後三時半ごろ、警察署で桜島の様子を確認すると、鹿児島市内には噴石が落下し、県庁から避難命令が出ていること、鹿屋・志布志など桜島から東方にある地域は雪のように灰が降っていること、重富・加治木・浜之市など桜島北方沿岸には桜島からの避難民が群れをなしていると書かれています。

午後七時ごろ、津波と大地震の襲来を恐れて荷物を運ぶ人が多かったようです。不安を感じている人が多く、日記を書いた人は午後九時半に灰まみれになりながら警察署に向かい、爆発はいつやむか分からないけれど津波の心配はないとの答えをもらっています。

鹿児島市との電話は不通で、国分停車場（現・隼人駅）と、浜之市、福山方面、都城方面としか通信できなくなっていたようです。

翌日も爆発は続き、空は煙に覆われたため、荷物を持つ人、馬に背負わす人が続々と増え、避難しなければならない根拠となる情報があるのか、それとも人々の恐怖心からデマが飛び交っているのか、と日記に綴られており、この人は再び警察署を尋ね、確かな情報があるのか確認したところ、むやみに騒ぐ必要はないと言われたので家族の避難はとどめたと書いています。

情報量や交通手段などさまざまな面で九十八年前とは大きく状況が異なりますが、史料や遺跡から災害の歴史を読み取ることで、今後、非常事態に備えどのような対応を取るべきか見えてくるのではないでしょうか。

文責＝坂

隼人港の東角にある記念碑